

# 第1章

---

## 大洲市の概要と歴史



## 第一節 位置と地勢

大洲市は四国の北西部に位置し、北方は瀬戸内海、西方は豊後水道にそれぞれ十数キロのところにある。市域二四〇・九九平方キロメートルの市街地の中央を肱川が蛇行して流れ、古来より氾濫を繰り返しながら肥沃な盆地を形成してきた。肱川の河口から大洲城跡までの距離は約一八キロメートル、水面の高さは約一〇メートルで、河口へ向けて水は緩やかに流れる。流域面積は一、二一〇平方キロメートルで全国五十五位ではあるが、支流の数は四百七十四本で全国五位となる。四国山地より流れ下る水を集めて、太古より舟運が発達していた。

江戸時代の初めまで大津と称されていたこの地は、川の港として肱川の物資が集積する経済の中心を担っていたことが想像できる。やがて、近代に入り河口の長浜より鉄道が布設され、道路の整備が始まると、次第に舟運は廃れていった。

現在は、鉄道においては予讃線の海まわり、山まわりの結節点となり、道路網も国道五六号、一九七号、四四一号のほか、松山自動車道大洲インター、大洲北只インターなどを有する陸上交通の要衝としての位置にある。

気候は温暖ではあるが、内陸性盆地気候で最高気温と最低気温の温度差が大きく、特に晩秋から早春にかけて発生する霧は、盆地を覆い尽くし水墨画さながらの景色をつくりだす。大洲盆地は、市域の約七〇%を占める標高五〇～五〇〇メートルの丘陵や山地に取り囲まれ、早朝に高い山に登ると雲海の景色を臨むことができる。

人口は、平成十二年の国勢調査で三九、〇一一人、平成七年の調査と

比較すると七四人の微増である。このうち、六十五歳以上の占める高齢化率は、平成十六年度において二三・六%に及んでいる。

産業は、総生産構成比において、第一次産業二・八%、第二次産業二五・二%、第三次産業七二・〇%となっているが、市域の大部分を農業用地が占めている。

平成十七年一月十一日、大洲市は周辺の喜多郡長浜町、肱川町、河辺村と合併して新しい大洲市となる。総面積四三二平方キロメートル、人口五二、七〇〇人の新市が誕生する。

## 第二節 歴史

大洲では、肱川に育まれた肥沃な土地に太古より人々が暮らしていた。その歴史は、縄文早期にまで遡る。新谷地区田舎遺跡からは、押型文土器片が出土している。古代遺跡の分布は、市内各所に及んでいるが、弥生時代の土器片の出土が著しい。

大洲では古代において独自の文化が開花していた。昭和三年の調査において、鳥居龍蔵氏が『東洋一のメンヒル』と称した高山の立石のほか規模は小さいが菅田町宇津にも立石がある。また、富士山山頂付近には、『盤珪座禅石』と称されるドルメン状の巨石が現存し、これらは大洲盆地の東端にある神南山の西側の山頂に向けて立っている。古代において、神南山の西の頂が信仰の中心となっていたと考えられる。

この巨石遺跡とは別に、当地方は日本神話に登場する少彦名の終焉の地としての伝説が残り、現在でも少彦名を祭る神社が数社存在する。残念ながら、この神話と古代遺跡との因果関係は詳らかでない。

文献での当地方の地名の初見は、貞観八年（八六六）のことで、『三代実録』に宇和郡から大洲地方の喜多郡が分立したとある。『倭名類聚抄』では、喜多郡に属する郷は矢野、久米、新屋の三郷であったとある。さらに、天曆四年（九五〇）の正倉院文書には、東大寺、寺領伊予国の封戸等の租庸調についての記録がある。それまでの伊予国の封戸が一〇〇戸から二〇〇戸に増加し、その増えた分が喜多郡の一〇〇戸であったとあり、当時この地方の民力が充実していたことが分かる。この頃、藤原純友による承平・天慶の乱が起り、『日本紀略』によると承平四年（九三四）に海賊が喜多郡不動穀を略奪するとの記述がある。天慶二年（九

三九）、純友追討の殊功により国司に命ぜられた天智天皇の孫である喜良喜命が勧請した祇園神社は、現在でも南予地方の神社として信仰を集めている。

中世に入り、宇都宮豊房が元徳二年（一一三〇）伊予の国の守護を命じられ、翌元弘元年（一一三二）に大津地藏ヶ嶽に城を築いた。『日光山並当社縁起』による）これが現在の大洲城の始まりと考えられる。以来、戦国末期の永禄十一年（一五六八）までの二三七年間宇都宮氏の居城であった。

戦国時代の伊予の勢力は、大洲の北の道後湯築城に数百年の歴史をもつ河野氏があり、大洲の南には南北朝期に京都より下向土着した西園寺氏が宇和黒瀬城にいた。さらに南の土佐には応仁の乱後下向して戦国大名になった一条氏があったが、長宗我部氏が代わって土佐を統一するとともに、四国全土の統一に乗り出していた。さらに、瀬戸内海を介して伊予の北には中国統一をはかる毛利氏、伊予の西には豊後の大友氏という大きな勢力があった。これらの間にあって大洲の城に拠る宇都宮氏は、周辺諸勢力と或いは結び、或いは攻められる、複雑な情勢のなかでかろうじて生き長らえていた。しかし、永禄十一年（一五六八）河野・毛利連合軍に敗れ、城は河野の部将大野直昌なほしげが預かった。

天正十三年（一五八五）、秀吉は四国平定を果たした。この戦いで、大洲城では、大野直昌の弟直之が小早川・吉川連合軍に敗れた。戦後、小早川隆景は、伊予三十五万石を与えられ湯築城を居城とし、大洲城は枝城となった。

小早川隆景が九州に転封となった天正十五年（一五八七）、戸田勝隆が宇和・喜多郡十六万石に封ぜられ主城を大洲とした。板島、松葉、黒瀬の各城には城代を置いた。

文禄三年（一五九四）に朝鮮で病死した戸田勝隆の後を受け、文禄四年（一五九五）六月に藤堂高虎が宇和郡板島七万石の城主として封ぜられた。併せて宇和、喜多、浮穴各郡約六万六千石の蔵入り代官を命じられた。高虎は、入府と同時に板島丸串城の築城に取り掛かるとともに、板島に城代を置き、大洲城を居城とした。慶長二年（一五九七）、朝鮮半島より捕虜約千人を大洲城下に連れ帰るが、その中に儒学者姜沆かんぱうがいた。後に藤原惺窩せいこに出会い、朱子学を教える。慶長五年（一六〇〇）高虎は、関ヶ原の戦いの功績により今張国分山城を追増され二十万石となり、慶長六年（一六〇一）渡辺勘兵衛に喜多・浮穴の内二万石を与えた。さらに、慶長七年（一六〇二）には今治城の普請を始め、大洲には藤堂高吉を城代に据える。慶長十年（一六〇五）奉行田中林斎は、命を受けて城下に塩屋町を創設した商人に、褒状を送っている。このころから次第に大洲が城下町としての体勢を整え始めた。

一説によると高虎は、朝鮮半島への出兵及び瀬戸内南西地域の守りのために秀吉により遣わされたといわれる。肱川は、今では水深が浅く想像し難いが、かつては日常的に川船や筏が行き交う流通の動脈であった。このため、物資の集積地として、四国西部の要衝として大洲城の地位は、確たるものとなっていた。

慶長十三年（一六〇八）、高虎は、伊賀一国及び伊勢のうち合わせて二十二万石で伊勢安濃津城へ移った。翌慶長十四年（一六〇九）、淡路洲本城より高虎と同じ近江出身の脇坂安治が喜多、浮穴、風早三郡において五万三千五百石を与えられ、大津城を居城とした。これは、高虎の後、瀬戸内対岸の福島正則に対する備えであったと解する見方もある。大洲では高虎により、既に城下としての町割がほぼ完成していた。脇坂氏は、給人所法度や庄屋体制を確立し、大洲藩での近世的封建制度の体制づく

りをほぼ形付けたと考えられる。脇坂氏は、元和三年（一六一七）五万五千石で信濃飯田城主として移る。その後播州龍野城主となる。

同年、脇坂氏に代わり伯耆国米子から加藤貞泰が六万石で大洲城に入城。以来、加藤氏の治世は版籍奉還まで続く。加藤氏入城の際には、城郭の整備はほぼ終了していたものと考えられる。

加藤氏の領地である六万石は、当初喜多郡及び浮穴郡の内四万五千石、風早郡の内八千石、桑村郡の内六千四百石、撰津国武庫郡の内六百石であった。二代藩主泰興の治世下において、寛永十六年（一六三九）に弟直泰に対して一万石を内分し、新谷藩加藤家が誕生した。この内分にあたっては、大洲加藤家は六万石のまま、新谷加藤家も知行一万石の大名家としての格式を与えられた。

泰興の治世下には、好学の気風も浸透していった。わが国での陽明学の祖である中江藤樹が大洲を離れ近江安曇川に帰郷した後、藩士たちは藤樹に教えを請うために藩王の許可を得て近江へ赴いた。この気風は脈々と受け継がれ、延享四年（一七四七）には藩校『止善書院明倫堂』の開設が行われた。

当時の産業は、和紙と木蠟の生産が主産業であった。農作物を原料にして加工し製品を作り上げ全国に流通させることにより、藩の重要な財源となっていた。しかし、近代に入り、欧米の先進技術の導入により次第にこれらの生産量は減少していった。

版籍奉還を終え明治に入ると、行政組織の枠組みは大洲県及び新谷県、宇和島県、神山県と改称し明治六年（一八七三）に現在の愛媛県となる。市町村も合併を繰り返して、昭和二十九年（一九五四）に一町九村が合併し大洲市が誕生した。当地方で明治の半ばに確立された近代製糸業は重要な産業となり、当時斜陽を迎えていた和紙と木蠟に代わって広まって

いった。この頃の富の集積により、町中の商家が次第に建てかえられていった。現在残る臥龍山荘や大洲商業銀行社屋（おおず赤煉瓦館）などは、明治三十年から四十年にかけて建てられたものである。また、かつての城下であった肱南地区に、江戸時代の町割が今でもほとんどそのまま残っているのは、明治の交通量が江戸時代のそれと大差なかったためと想像できる。

大洲市では、何度となく天守復元の機運が生まれては下火となってきた。昭和五十九年（一九八四）に市制施行三十周年記念事業で検討された鉄筋による復元計画は、実現に至らなかった最後のものとなった。しかしながら、この後かつての城下において、平成三年大洲商業銀行社屋（おおず赤煉瓦館）の改修、平成五年肱南歴史の道整備事業による路面の整備、平成六年肱川護岸修景事業、平成八年臥龍山荘改修などの事業が順次完成し、城下町としての修景事業が整備されるにしたがい、天守復元を願う声が高まっていった。平成六年の市制施行四十周年には十年後に天守を復元するため、市の基金造成について市議会で可決された。さらに、天守完成を前にして、大洲城跡付近約四ヘクタールを都市公園として都市計画決定し、当地方の固有の歴史を市民の皆さんに楽しんでもいただける『城山公園』整備に取り組んでいる。

大洲城天守復元事業は、今までに培われてきた大洲の歴史・文化のランドマークづくりにほかならない。